Osaka University Knowledge Archive

Title	ジョンズホプキンス公衆衛生大学院留学にて役立ったこと、身についたこと
Author(s)	富山, 幸一郎
Citation	目で見るWHO. 2025, 91, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101040
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ジョンズホプキンス公衆衛生大学院留学にて役立ったこと、身についたこと

長崎大学病院感染症内科
元ジョンズホプキンス公衆衛生大学院　公衆衛生学修士課程
富山 幸一郎（とみやま こういちろう）

愛媛大学卒。広島共立病院にて初期研修、国立国際医療研究センター病院にて救急研修修了。国際協力局にてベトナム、モンゴルで国際協力にも従事。2023年6月よりジョンズホプキンス公衆衛生大学院所属。翌年9月より現所属。

はじめに

2023 年 6 月から 2024 年 5 月までアメリカのボルチモアにあるジョンズホプキンス公衆衛生大学院に留学しておりました。私にとっては初めての、一人での長期海外生活、留学であり大変貴重な経験になりました。今回は、私が何を学んできたかをお伝えするとともに、留学を志している方への私なりのアドバイスをお伝えできればと思います。まずは留学に至った経緯をお話ししたいと思います。

留学の動機

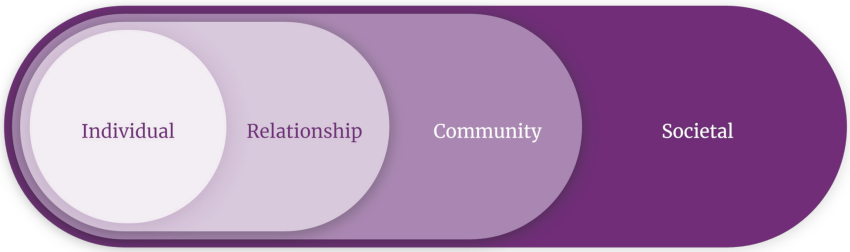
学生時代より漠然と留学や国際協力への思いがあり、インドネシアの孤児院にボランティアに行ったこともありましたが、公衆衛生学修士留学（MPH 留学）の思いが強くなったのは国立国際医療研究センター病院にて救急医として従事していたときです。東京新宿での救急で、貧困、家族関係、飲酒、薬物使用などの健康の社会的決定要因と、救急搬送、再救急搬送が密接にかかわっていると肌で感じ、行動変容学による予防に努めたいと思いました。そこで同じく社会課題の研究が盛んなジョンズホプキンス公衆衛生大学院への留学を決意しました。

MPH 留学準備で役立ったこと

MPH 出願の際に役に立ったことの一つが自分の Experience & Skill Storage を作成したことです。 これは自分が今まで何を経験してきたか、どのようなスキルを獲得してきたか、どのような出来事があったかを自分が生まれてからの時系列に沿ってまとめたものです。自分の経験やスキルを整理するとともに、なぜ MPH 出願に至ったかも振り返ることができ、モチベーション維持や、ストーリー性のある Statement of Purpose 、まとまった CV 作成にとても役立ちました。ジョンズホプキンス公衆衛生大学院に留学後も、再度、MPH 中にどのようなスキルを獲得したいのかを Self-reflection する授業があり、その時にも役立ちました。

学んだこと、留学しての発見

留学を決意した経緯から、社会行動学と疫学統計の授業を主に選択しました。MPH 留学して学んだ印象的なことの一つに、社会行動学の Fundamentals of Health, Behavior and Society のクラスで最初に習う Socio-Ecological Model があります [1)]。このモデルは、個人の行動は、個人の要素のみでなく、周りの人々、コミュニティ、社会との密接なかかわりで決定されるというモデルです。健康の社会的決定要因は知っていましたが、あらためてモデルを学ぶことで、頭の中が整理されました。すべての授業がこのモデルのどこの内容なのかをはじめに提示してから進むのでとてもわかりやすかったです。この授業を受けた後に自分の臨床での振る舞いを振り返って、疾病再発予防のための患者さんへのアドバイスが、いかに個人要素のみに集中していたかを感じました。例えば、アルコール性肝障害、食道静脈瘤破裂にて救急搬送され、集中治療をした後に「かなり重症な状態だったのですよ、もうお酒を飲むことはしないでくださいね」とよく伝えていました。自分としてはアドバイスをしたつもりだったのですが、もしかしたらその患者さんは背景因子として、貧困で人間関係が破綻しており、逃避行動として飲酒していたのかもしれません。忙しい救急の現場で表面に出てくる患者さんの行動にのみ焦点を当てて接していたのかもしれないと反省するきっかけになった授業でした。同時に実臨床で医師がすべての患者さんに対して時間をかけてそこまで踏み込むことも現実的ではないと感じました。ジョンズホプキンス公衆衛生大学院では、医師・看護師だけでなく、



Socio-Ecological Model：　Socio-Ecological Model。個人の行動は個人の要素のみならず、人間関係、コミュニティ、社会の要素の影響をうけているということを表した図

❶修士論文発表の写真：修士論文の発表の様子。緊張したが、質疑応答にも返答することができました。
❷JHIFでの劇の写真：JHIFでクリスマスの時期に行われたキリスト誕生の劇の衣装。賢者役を務めました。

学校の先生、カウンセリング専門家、社会学専門家、弁護士など、さまざまなバックグラウンドをもつ人々がMPHコースに在学しており、勤務、研究していました。これから日本の医療の現場においても、幅広い職種でのコラボレーションが一層重要になると感じました。

二つ目の印象的なこととして、MPH修士論文(Capstone Thesis)の執筆があります。私は、Capstoneのテーマとして、ジョンズホプキンス公衆衛生大学院のALIVE studyのコホートデータを用いた、「注射薬物使用患者における違法薬物使用と非致死的薬物中毒に対する保護因子」を選びました。この研究では、あらかじめ収集されたデータを用いて、自分でデータの性質を解析して統計解析計画を立てて、解析、執筆していくという、今まで疫学統計で得た知識を使用しての執筆経験でした。初めての自分での英文修士論文の執筆ということもあり、つまずく点も多かったですが、アドバイザーの方にフィードバックをもらいながらなんとか書き上げることができ、とても貴重な経験となりました。ジョンズホプキンスの授業では、コース中に得た知識をシミュレーションや実践で生かすという形式がとられることが多く、インプットとアウトプットのバランスが良く、得た知識やスキルが身に付きやすいと感じました。

今後の進路

日本において、健康の社会的決定要因が救急外来に及ぼす影響を感じ、MPH留学を決意しましたが、その後のMPH留学中に、アメリカでのオピオイド中毒のパンデミックや人種による健康格差を目の当たりにしました。またFormative Researchのコースで紹介されたバングラディシュの公衆衛生状況で、政治情勢により医療にアクセスできず苦しんでいる人々がいるという状況を聞き、グローバルヘルスに関わりたいという気持ちが強くなりました。アメリカで研究者として挑戦するという道も考えましたが、日本で感染症のトレーニングを積んでから疫学者としてグローバルヘルスに関わりたいと思うようになり、2024年9月より、長崎大学病院感染症内科にて勤務させていただくこととなりました。

おわりに

アメリカ滞在中にできるだけ、授業外のネットワークを作ろうと、Johns Hopkins International Fellowship (JHIF)の集まりに積極的に参加しました。JHIFにて聖書輪読をしたり、クリスマスのキリスト誕生の劇で賢者役をつとめたりなどアメリカに根付いたキリスト教文化に触れました。日本の文化紹介のために、持ち寄りパーティーで手巻きずしを振る舞いし、大変好評で、パーティーの途中まですし職人と化していました。文化交流ができ、とてもいい経験となりました。

MPH留学前、留学中、留学後と、色々なことを経験して、予定していた計画は変化していきました。しかし、情報の整理の仕方、プランの立て方、MPH留学で得た知識やスキルは、どのような進路であっても活用していけると思っており、今後の臨床、研究に生かして、励んでいけたらと考えております。MPH留学を検討している方がMPHにてどのようなことを学習するのかイメージが付き、検討の一助となれば幸いです。

参考文献：

1）CDC. About Violence Prevention. April 4, 2024. https://www.cdc.gov/violence-prevention/about/?CDC_AAref_Val=https://www.cdc.gov/violenceprevention/about/social-ecologicalmodel.